

【吾が人生の生涯学習素材 Zigzag-memo】の作成事由

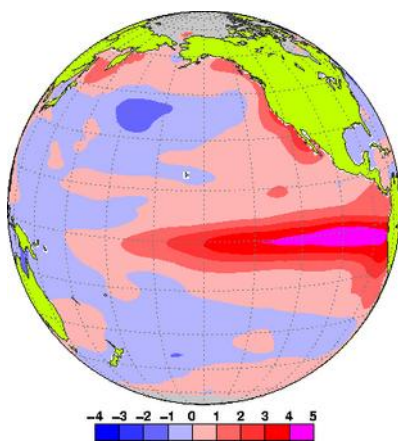
私の性格は「彩色性多重人格」、「^{びと}新型風見鶏人」、Moving oval man（^{びと}動的楕円形人）、この人間を端的に言うと次の3点で表せる、日々気まぐれ人生であり、とにかく気象現象そのものの類似である。定常状態が決して長く続かないのである。

□1；エルニーニョ・図-1a とラニーニャ図 1b と台風図 1c の同時併存性

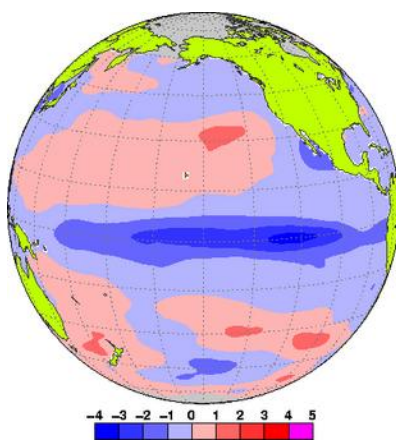
□2；ジグザグ・右往左往・乱高下の不安定性

□3；感じたままの放縦性

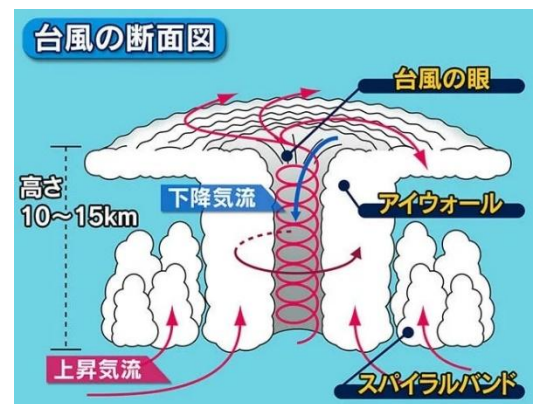
図-1ab は <https://www.assetfor.co.jp/>、同 1c は <https://weatherlearning.hatenablog.jp/> より引用したものの。



図(表)-1a



図(表)-1b



図(表)-1c

その上で、以下に“私の心の再生工場物語り風”で書いて行く。登場人物を他界した父（昭和 20 年終戦直後の秋に入植した開拓において貧苦艱難を潜り抜けた百姓/戒名は拓原力斗篤農居士たくげんりきとうとくのう）と、私こと息子（総領の甚六木偶坊でくのぼう）とが、田畑で扱き合うシチュエーションを設定した、記述は二人の言葉をマージしたものである。生前の父は貪百姓でありながら政治経済、社会問題を論じるのが大好きであった、父の口癖は折に触れて太平洋戦争開戦時連合艦隊司令長官山本五十六の名句「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」を持ち出し、私が社会人となってからは帰省する度に、地区の若者達を呼び寄せつつ、酒を飲みながら夜遅くまで人生万般を議論した永遠の師匠である。

さて、私は、今は廃校となった新庄工業高等学校電気過程を卒業した 1968（昭和 43）年、4 月 1 日付けを以って、電気エネルギー産業の民間企業東北電力（株）に入社した、41 年長勤務した 2009（平成 21）年 6 月に満 60 歳で定年退職した。2 年 6 か月毎に職場を変わり、16 個所の職場を経験し、住まいは自宅の他 12 個所に及び、家族共々では 8 個所の住み替えで転勤し、その間、技術部門から事務部門まで広範な職種に従事し、転勤先の地域を含め様々な人達と交流を図って来た。また、現場でお客様に直接対峙・対応する仕事からバックヤードの管理部門まで多岐に亘った。

そんな会社人生の期間中に登山の会に入り夏山登山をやっていたが、定年退職以降 75 歳の今日までの 15 年間余り、登山にも行ったが全国の主要な歴史街道・歴史古道や四国へんろ、その他の歩き旅遊学紀行を楽しんで来た。この 15 年間中で現地実質行動は 10 年間で 15,546km、現地滞在 512 日間（泊）に及び、全国各地多くの人達との交流を図った。また、この間の日常暮らしにおける様々なお付き合いの中

で、心から尊敬出来る高潔な人との新たな出会いがあり心から幸せに思っている。

そんな中、吾自身のアイデンティティ (identity) とは何ぞや？ これまでの人生とは何だったのか？ いやいやそんなことよりもこれからの余生をどうするのか？ 日常における地域での対人関係は？ 日常の有意義な過ごし方とは？ など、これまでの総括的締め括りと、未発のこれからの人生について種々雑多なことが浮かんで来た。それらの自問自答を少しずつ文書に整理し保存しているものの一部である。今の私の思考、今の私の生き方指針、今の私の精神的安らぎを得る言葉の整理でもある。

人を指す「人、人間、相手、他人」の文字を多用しているが、もちろん、「私」を含んで使っている。“大沼の言うことは理想だ”と揶揄・一蹴されそうだが、思うに、理想精神は向上心を育み、向上心は理想精神を高め、万人に備わっている仏性の一面である、絵空事の妄信ではない。自生・自性する理想精神を潰しているのであればとてももったいない人生である。ところで、スイスの哲学者・詩人アミエルの日記にある「※人間は習慣の織物である。」(※・訳し方で人生とか生活とかを当てている人もいる。)の名言を思い出した。日常平生をどのように生きるのか、その小さな積み重ねが習慣だ。私が敬慕^{ししゅく}・私淑する安岡

^{まさひろ}正篤先生は「一燈照隅 萬燈遍照」を提唱されている、一言では「一灯照隅行」とおっしゃられている。一人ひとりでは微力かもしれないが、その立場において、その人の特技・得手・強みを以って、怠惰と闘い全力で目の前の課題と取り組めということだろう。そうするみんなの微力は自然総合されて成果・繁栄を生むということだろう。私は安岡先生の言葉を借りて、自身の日々の人生は「**身の丈一灯照隅行**」であると肝に銘じている。

そもそも行政あげて「生涯学習」と声高々に叫んでいるではないか。「生涯学習」は一方的な何かではなく、「ごちゃまぜ」思想を優是とし切磋琢磨の場と位置付けるべきである。烏合の衆・グル・ムレのタマリを推奨しているのではないはず。そのためには、まずは一人一人が安直な毎日ではなく、自分自身を律し、心の改造更新の真剣な努力無くして、「生涯学習」の実は上がらないと思う。「**身の丈一灯照隅行**」の当事者としての意図を以って書いている。

ところで、私が管理職になった頃に覚えた言葉「ノブレス・オブリージュ」——身分の高い者はそれに応じて果たさねばならぬ社会的責任と義務のこと。霞が関から身近などこのコミュニティにも「何とか長」の付く人がわんさという。「何とか長」とは一組織内・閉鎖空間内のデスクに付いたもの(役職)で、人間性に付いたものではないのだ、デスクに座った時(執務時間中・業務時間中)だけ、その権能を行使出来るのだが、“俺の人格に24時間付着したのだ”と勝手に決め付け妄想するものだから、今世の荒れ様・退廃ぶりは目も当てられない。足元に帰って“コミュニティの「何とか長」たる者よ、カッコいい大人の見本たれ！” どんな場であれ、

✓肩書にプライドを感じるならば「ノブレス・オブリージュ」の完全実行者であれ。

✓肩書で指揮命令するならば「ノブレス・オブリージュ」の完全実行者であれ。

✓肩書を外したらその貴方に何が残るのか？

私の現役時代の先輩先生と仰いだ加藤太一郎さんは、様々なトラブルがあり、周りで愚痴を言うと“隣の猫孕んだのは俺の斉だ”と冗談で場を和ませつつ、何事も率先垂範責務を完璧遂行、逃げない、米沢藩9代藩主上杉鷹山^{はるのり}(治憲)公の名句「なせば成る なさねば成らぬ何事も 成らぬは人のなさぬ成りけり」を取り上げて人間道を説いていた、まさに「ノブレス・オブリージュ」を地で行く言動であった。

以下、私の「分別知」、浅学菲才・軽佻浮薄の身を省みず、大そう偉そうな大言壮語の我田引水・自己陶醉・自画自賛を並べ立てるが、総ては素直・ストレートな心の記録である。あえてなぜなのかというと、私自身は、日々の暮らしにおいて、怠惰・薄志弱行に流され、安直な道を歩むのは安楽であるという自覚がある。しかし、他方でそれでいいのかという自問が湧く、どちらに行くべきなのか、自墮落を少しでも封じ大風呂敷を広げて叫ぶ他はないと、心に従順になればこそその命だと思ふからである。表の顔と裏の顔の切磋琢磨であり、有体^{ありてい}に言えば心の中の仏性と魔性の対峙を書いたものである、生前の父とのバトルを思い出しつつ私の独り言である。

過去の栄光（何とか長の肩書、何とか表彰を授与したとか・・・）や過去の成功体験（商売繁盛したとか、何とか大会で優勝したとか・・・）の回顧にしがみ付くな！と強く自戒しており、翻ってそこから何を学んで、その学んだことを今この時に生かしているか、**今この時に**どのように活かして行動しているかと自問自答している。昔の回顧に浸って私は心が安らぐということはない。私のこのような思いを好きな言葉に表すと、今ここでは次のとおりである。

生きているこの時空は、 私的であれ、公的であれ、人が集まれば、あるいは個人の心であれ、 対等互啓（恵）を優是として学び合う場なのだ		
老壮青の組み合わせ	▷ 温故知新 不易流行 更新 脱皮 カスタマイズ 探究心 好奇心 冒険心	◁ 百人百様のごちゃ混ぜ
▽ 新しい「もの・こと」が生まれる		
図(表)－ 2		

今、ここで、“大沼の人生生き方指針を一つの文字で言え”と言われた場合、「自由（freedom Freedom FREEDOM）」である。一般社会人として集う場面においては、「支配される、支配する」雰囲気は絶対に忌避する。私の心は“とことんとことん Syncretism(シンクレティズム)”を以って共創立脚にある、このようなことに同期（同感ではない）を感じられない人は忌避する。

戻って、前出安岡先生は“『立志・義命』を明らめ『立命』していかなければならない”と喝破されている、心が震える。私の解釈は、一生一度の命を頂戴した万物の霊長たる人間として、如何にあるべきかに向き合い、命の赴く処に従い真剣まじめに「中道正観」行（空海の言葉）にまい進せよということだと思っている。残余の命が短くなった者としては、人間関係の中で、今更、媚びる、阿諛迎合^{あゆあごう}を以って付き合う必要はまったくなし。私は「自由への闘争」——個人の自律性を追求し、他者の干渉や抑圧からの解放を乞い、社会的な制度や規範、そして内なる抑圧的な思考や感情に抵抗し、自己決定権を確立するための努力を続けたい。上記の様々な言葉を噛み締めて、清新澆刺とした身の丈孤高の妙を十分に味わいたく、最後は満足・満足・大満足！ 成功・成功・大成功！と心静かに唱え、息をこの世に置いてあの世に逝きたいと念じている。

< 大 沼 香 >